

「日本河川・流域再生ネットワーク（JRRN）」は、河川再生について共に考え、次の行動へ後押しする未来志向の情報を交換・共有することを通じ、各地域に相応しい河川再生の技術や仕組みづくりの発展に寄与することを目的に活動する団体です。またアジア河川・流域再生ネットワーク（ARRN）の日本窓口として、日本の優れた知見をアジアに向け発信し、海外の素晴らしい取組みを国内に還元する役割を担います。

目次

	Pages
➤ JRRN 事務局からのお知らせ.....	1
➤ 会員寄稿記事.....	3
➤ JRRN 会員・ARRN 関係者からのお知らせ.....	12
➤ 会議・イベント案内.....	13
➤ 書籍等の紹介.....	13
➤ 会員募集中.....	14

JRRN 事務局からのお知らせ (1) JRRN Activity Report

「小さな自然再生」事例集制作プロジェクト進捗報告

JRRN では、市民が河川管理者と連携して日曜大工的に取り組める「小さな自然再生」に関わる事例集の制作を、編集委員会を立ち上げて協働で進めております。1月の活動では、事前集（下記構成参照）完成に向けた最終調整段階に入っており、主に「3. 事例紹介」のデザイン編集や、「4. 『小さな自然再生』座談会」に係る原稿用のまとめ作業を行っております。

力をいただいております。まさに現場のプロが執筆した内容を、見せ方のプロが形にするというこだわりを、皆様が手に取った際に感じていただけたと思います。

座談会のまとめ作業については、事務局としては本当は協議内容全文を掲載したいという思いがありました。それを事例集の限られた頁にまとめるというのは、ある意味勿体ないことであり、なるべく座談会メンバー皆様のご発言（思い）を損なわないように編集することに苦慮しました。もちろん今回の事例集では割愛させていただきました内容もありますが、例えば、「小さな自然再生」の定義に関する議論などは、事例集のそれぞれのコンテンツに生きておりますので、座談会が4.の内容だけにとどまらず、事例集全体としてより良い内容にするものであったことを、あえてここに記載させていただきます。

当初の予定では、そろそろ皆様のお手元に事例集をお届けできるはずでしたが、申し訳ございません。なるべく早く完成できるように事務局総出で作業を進めてまいります。事例集に掲載する事例の位置情報などは、「AQMAP」にて情報発信しておりますので、そちらをご覧ください。ありがとうございます。

水辺の小さな自然再生 事例集 構成

1. 水辺の小さな自然再生とは

(内容) 「小さな自然再生」の定義や基本的な知識

2. 水辺の小さな自然再生を行うための留意点

(内容) 河川管理者の許可や地域住民との調整・連携、治水や景観への配慮など、知っておくべき必要事項

3. 事例紹介

(内容) 執筆者である編集委員それぞれの思い入れのある16の事例と、特集記事として上西郷川現地にて行った島谷先生（九州大学）へのインタビュー

4. 「小さな自然再生」座談会

(内容) 関係省庁の行政担当官と現場の技術者で開催された座談会での、活動推進に向けた協議内容

巻末資料1. 編集委員紹介

巻末資料2. 現場へ行ってみよう(AQMAP 紹介)

巻末資料3. 参考図書

事例のデザイン編集については、編集委員の方々に折角執筆いただいた面白い内容でも、デザイン（見せ方）によって読み辛いものになってしまうと勿体ないです。土木系出身者である私どもが編集をしてしまうと、どうしても論文や報告書のような堅苦しいものになってしまうので、そこはデザイン専門の方の全面的な協



AQMAP <http://www.aqmap.info/>

(JRRN 事務局・後藤勝洋)

“国際河川賞 2015(International Riverprize)”応募要領を公開しました

JRRN では、河川再生に関わる日本の優れた経験・知見を海外に広く普及していくことを目的に、本年も英語公開情報に基づき『日本が誇る河川再生の経験を世界に伝えよう! “国際河川賞 2015” 応募要領』(日本語版)を作成しました。



※第 18 回国際河川シンポジウムの案内ページ

<http://riversymposium.com/>



※応募要領のダウンロードはこちらから

<http://jp.a-rr.net/jp/news/info/545.html>

<応募要領目次>

1. はじめに～応募要領作成の目的～
2. “国際河川賞”主催者からのメッセージ
3. 国際河川賞 (International Riverprize) とは?
4. 過去の受賞河川の紹介
5. 応募から受賞までの流れ (必要諸手続き含む)
6. 受賞した場合の義務や期待される役割
7. 参考資料 (関連英語資料の入手先 URL)

国際河川賞 (International Riverprize) は、パートナーシップに基づく河川・流域再生を讃える国際的にも名誉ある賞の一つで、河川・流域再生の成功経験の共有を目的に毎年秋に開催される国際河川シンポジウム (International Riversymposium) において最優秀河川が毎年 1 つ選ばれます。

本年は国際河川賞の応募締切が **2015 年 3 月 6 日 (金)** に決まり、3 月下旬に一次審査の発表、また 6 月の二次応募と選考プロセスを経て、7 月中には最終選考に進む 4 河川前後が発表されます。そして、9 月 21 日 (月)～24 日 (木) にオーストラリア国ブリスベンで開催される第 18 回国際河川シンポジウムにおいて最終選考河川による口頭発表が行われ、9 月 22 日 (火) には最優秀河川が決まる予定です。

この国際河川賞には、河川、湿地、湖沼、河口域における再生や保全に取り組む団体が応募できます。本要領をご覧になり、国際河川賞への応募をご検討の際は、JRRN 事務局までご連絡をお待ちしております。資金面でのサポートはできませんが、応募や各申請過程における可能な範囲の助言と支援にご協力させていただきます。

なお、主催団体である「国際河川財団 (International Riverfoundation)」CEO の Nick Schofield 氏より、JRRN 会員をはじめ日本の河川再生に取り組む方々へ以下のメッセージが届いています。

日本で河川・流域再生に取り組む皆様へ

国際河川財団では、優れた河川流域管理の担い手の方々に向けて、2015 年 Thies International Riverprize への応募を呼びかけています。この国際河川賞は、河川流域の再生、保全、持続的な管理に関わる優れた実績を毎年讃えるものです。国際河川賞の優勝者は、賞金はもちろんのこと、トロフィーや世界的な知名度獲得など様々な特典を得ることができます。また国際河川賞に輝くことで、様々な組織との新たなパートナーシップを生み出し、また自身の活動に更なる活気をもたらすことで、目標の達成に近づく後押しとなるかもしれません。

河川、湿地、湖沼、河口域における再生、保全、持続的開発に取り組む団体の皆さんは是非とも国際河川賞に応募してみてください。国際河川賞の審査は、統合的か、協働型か、また科学的に実証された業績であるかといった審査基準に基づき、この分野の専門家集団によって行われます。そして優勝者は、2015 年 9 月 22 日にオーストラリア・ブリスベンでの第 18 回国際河川シンポジウムの祝賀晩餐会において、世界中から集った河川分野の専門家達の前で発表されます。応募申請は国際河川財団のホームページ (<http://www.riverfoundation.org.au/>) にて 2015 年 3 月 6 日まで受け付けております。

日本の皆様のご応募をお待ちしております。

Dr. Nick Schofield,
国際河川財団 Chief Executive Officer

(JRRN 事務局・和田彰)

水族館で魚道展を開催中

寄稿者：真田誠至（相模川ふれあい科学館 アクアリウムさがみはら・JRRN 会員）

1. 地域の河川環境を学ぶ学習拠点

相模川は神奈川県中央部を貫いて流れる全長 113km の河川です。その中流域に「相模川ふれあい科学館 アクアリウムさがみはら（以下、科学館）」は位置しています。科学館は 1987 年に開館、2014 年 3 月には参加体験型の学習施設としてリニューアルしました（写真 1）。相模川に生息する魚類を中心に両生類、爬虫類、水生昆虫等 100 種以上、約 7,000 点の生き物を展示しています。また、河川環境を学ぶハンズオン展示も追加され、地域の水環境を学ぶ拠点として、その役割が期待されています。

2. 展示体験で河川環境を学ぶ

常設展示は「川ゾーン」、「生命ゾーン」、「人ゾーン」、「情報交流ゾーン」から成っています。

まず、「川ゾーン」には、長さ 40m の大水槽（流れのアクアリウム）があり、相模川の上流、中流、下流、河口の生き物を展示しています（写真 2）。中流にはダムで堰止められた展示水槽もあり、相模川の特徴を的確に再現しています。来館者は流程によって異なる生き物の種類や生息場を、順にたどって観察することができます。また、水槽は上流から河口まで連続して設置されているので、川はやがて海に繋がることを視覚的に理解できます。

次に、「生命ゾーン」には魚道的水槽（坂道お魚観察水槽）があります。ドーナツ型的水槽に水流を発生させ、その一部に魚道を設置しています（写真 3）。給餌の際、ウグイやサケ科魚類は餌につられ、魚道を遡上する様子を観察することができます。現在は階段式魚道を設置していますが、今後はアイスハーバー式など新たな魚道を展示して、生物が魚道を利用する様子を広く市民の皆さんに見て頂きたいと計画しています。

そして、「人ゾーン」には相模川の豊かな自然の恵みと人との関係を学ぶことを目的に、魚道の模型や実験観察テーブル、タッチング水槽等があります。中でも湧水と小川のアクアリウムでは、来館者が手に握った餌を、水中で魚に直接与えることができます（写真 4）。現在、この体験ができる魚はコイ、ウグイ、アユ、ニジマス等である。中でもコイは川底の泥を吸い込んで餌を食べるが、実際に自分の手から与えることで、コイの吸引力を直接体感することができます。ここでは初めてタッチングを体験した来館者の歓声が、毎日のように聞こえてきます。



写真 1 リニューアルした相模川ふれあい科学館



写真 2 「川ゾーン」にある大水槽



写真 3 「生命ゾーン」にある魚道的水槽



写真4 湧水と小川のアクアリウム



写真5 「魚道展」案内



写真6 「魚道展」の様子

3. 自然体験と展示体験で複合的に学ぶ

相模川は科学館から徒歩10分のところにあり、来館者は容易に本物の自然とふれあうことができます。生き物の微生息場や周辺環境を調べる学習プログラムを、小中学校の総合学習、高校の生物実験、大学のフィールド実習等で実施しています。大学生の受講者からは「相模川に棲む生き物を展示でじっくり見ることができたし、本物の川の流れを体で感じることができた(20代・男子学生)」との声も聞かれ、複合的な体験を通じた効果に手ごたえを感じています。今後も科学館では、相模川の自然環境を守り育てるため、水環境を学ぶ拠点として、その役割を担っていきたくと考えています。

4. 巡回展示 魚道展を開催中

科学館では3月1日(日)まで、特別企画展示「川をつなぐ魚の道 魚道展」を開催しています(写真5)。「水の巡回展ネットワーク(jawanet)」が、全国の河川情報発信施設を巡回する企画展示として制作した「魚道展」に、科学館オリジナルの展示を加え再構成した内容になっています。模型や映像で魚道の特徴を学ぶだけでなく、魚の気持ちになって挑戦する魚道迷路や、館内の展示を巡るスタンプラリー、魚道を利用する遊泳魚、底生魚、甲殻類の生体展示など、魚道をきっかけに生物や河川環境に興味を持つ展示アイテムになっています(写真6)。ご家族で楽しみながら、魚道や川の環境について学ぶ機会となれば幸いです。



相模川ふれあい科学館
アクアリウムさがみはら

〒252-0246

神奈川県相模原市中央区水郷田名 1-5-1

TEL:042-762-2110 FAX:042-761-2665

URL: <http://sagamigawa-fureai.com/>

- ◇開館時間：9:30-16:30 (入館 16:00 まで)
- ◇休館日：月曜日 (月曜日が祝祭日の場合は開館し、振替休館無し) ※春休み・GW・夏休み・冬休み・年末年始など長期休暇期間は毎日開館
- ◇入館料：300円 (大人)
- ◇アクセス：JR 横浜線「相模原駅」から神奈中バス 水郷田名行き「ふれあい科学館前」下車すぐ
- ◇魚道展は2015年3月1日(日)まで開催

2月



川系男子の『川と人』めぐり No. 32～松美下池～

坂本貴啓 (筑波大学大学院 システム情報工学研究科 博士後期課程 白川直樹研究室『川と人』ゼミ)

『川と人』
めぐり

研究室のゼミ名『川と人』ゼミという言葉をもじって、『川と人』めぐりのタイトルで連載していきます。テーマは川と人。川が好きではない『川系男子』が川めぐりをしながら、川への思いや写真・動画などをご紹介していきます。

♪雪やこんこんあられやこんこん 降っては降ってははずんずん積もる
山も野原もわたぼうしかぶり 枯木残らず花が咲く

(文部省唱歌『雪』 作詞：不詳・作曲：不詳)



図1 筑波大学筑波キャンパスの一部と松美下池 (国土地理院2万5千分の1の地形図に加筆)

1. 人知れず残された関東平野の原野が大学に

2015年1月24日(土)、冬晴れの午後、大学内の松美下池を潜入調査した(図1)。この池は学内でも存在を知る人は少ない。大学の本部棟や主要エリア、幹線道路のすぐそばにあるのだが、通常通行しているだけでは存在を気が付かない。一步、道路からはずれ、藪の中に入り込んだ者だけがその池の姿をみることができる。

しかし、航空写真や地図などでみると、たしかにそこに池は存在するのである。

この池の話をする前に筑波大学のキャンパスについて紹介したい。

2. 筑波大学の沿革の背景

1950年代、東京の急速な人口増加の過密状態を解消するために首都機能の一部移転が検討されはじめた。移転先は東京都内から60km離れた茨城県の筑波山麓地区が選ばれ機能上必ずしも東京都の既成市街地に置く必要のない官庁の集団移転が検討された。それに伴い、1967年から各省庁の研究機関を中心に移転がはじまり研究学園都市が成立することとなる。面積にして2,700haと国をあげた大開発となった。

筑波大学の移転もこれに伴い行われた。筑波大学のはじまりは1872年(明治5年)にわが国に最初の東京師範学校として発足したことからはじまる(2015年10月1日をもって創基144年)。その後、東京文理科大学、

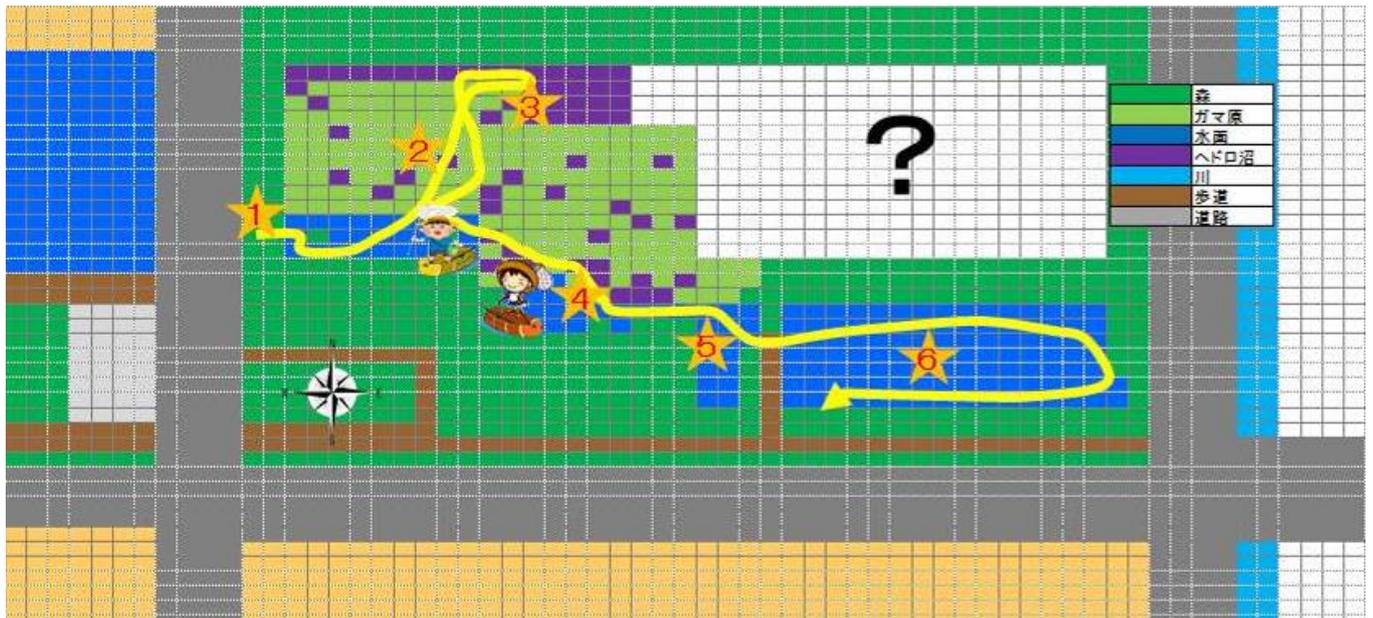


図2 松美下池ダンジョン図 (ダンジョン: 「迷宮」の意味)

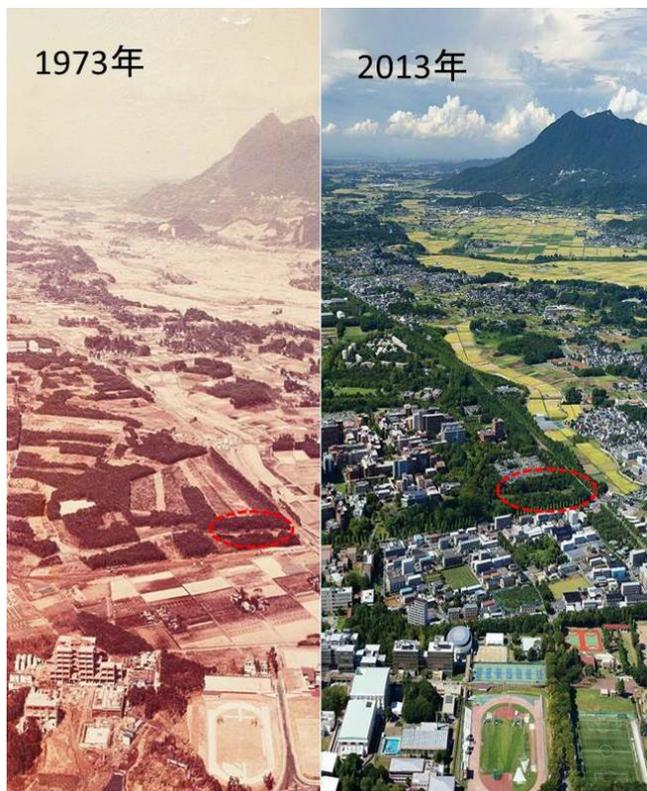


図3 筑波大学キャンパスの今昔と松美下池 (赤囲い) (筑波大今昔展のチラシ写真を筆者加筆)

東京教育大学の変革を経て、筑波大学となる。

筑波学園研究都市の移転構想と同時に東京教育大学を「新構想大学」として筑波の地に移転させたのである(1973年の筑波大学法案(国立大学設置法の一部改定案)により成立)。

東京都内から筑波山麓の田園地帯に移ってきた筑波大学は広大なキャンパスを保有することになる。その規模は南北約4km、東西約1km、総面積257haと日本の大学の単一キャンパスとしては最大級である。

当時を知る大学教員の話では、開学当初、ここはアカマツ林や湿地などの残る原野のような場所も多くあ



図4 ループと松美上池と松美下池

ったそうだ(図3)。雨の日は車が泥にはまる悪条件の場所であったそうだ。それが時代とともに整備が進み現在の研究棟の多く立ち並ぶキャンパスとなった。

3. 開学当初のままの姿を残す松美下池

40年近く歴史の中で開発が進んできたキャンパス内だが、当時からあった池を利用し、建物から排出される中水の排水を集める調整池として利用した。そのため、学内にある池は当時のものを利用している。その中でも研究棟や宿舎に隣接するものは護岸整備を行い整備された池となっているが、一部キャンパスの緑地保全地区に指定された場所は開学からほとんど手付かずで、松美下池もその一部である。

松美下池のある場所は大学のループと呼ばれる幹線循環路の東側にある(図4)。ループの西側には松美上池があり、こちらは自然科学・人文社会学系の建物が多く立ち並ぶ一学エリアと呼ばれる部分で、池のほとりも学生が散歩したり昼寝したりと賑わいのある池である。一方でループの東側に位置する松美下池は周囲を木々に覆われており、道からはその存在を確認することもできない。木々をかき分けて中に入ると、いかにも人を寄せ付けない雰囲気漂わせる池が姿を現す。開学当初から手付かずのこの池は40年近く、開発の手

表1 用意した道具

安全対策用具	ライフジャケット, 胴長, ボート, オール, 長靴, 救命用浮き輪, 救急セット, 笛
生物採集用具	サデ網, タモ網, 金魚網, バケツ, 魚仕掛け(網型), 仕掛けのエサ(ツナ, 味噌, インスタント麺)
観察用具	望遠鏡, カメラ, ビデオカメラ



図5 用意した道具



図6 潜入開始

も入らずこの姿を保ってきたのである。

2万人の学生と教職員がいるこのキャンパスの中で、年間に何人がわざわざ藪をかき分けてこの池の姿を見ようとするだろうか? ごくごく少数の人数しかいないであろう。今回4名の有志の潜入調査団を結成し、その全貌を明らかにするべく謎めいた原野の池に挑んだ。

4. 松美下池潜入開始(図2の地点1)

今回の調査の目的は池の全貌を把握することと、池の中にどんな生物が生息するのかを調査することであった。

そのためには安全対策を万全にした装備と体制を整える必要があった。装備は表1・図5のように揃えた。

さらに安全に調査を行えるよう、水中班は常に二人一組で、ボート2艇で行動し、緊急時の連絡役として陸上班を2名置き、救命用浮き輪等も準備を整えた。水辺での活動には常にリスクマネジメントが重要で、これでもかというくらいの準備が事故を未然に防いでくれる。

一緒に潜入した後輩Kと私がボートに乗り、探索を開始した(図6)。1月の冬空は晴れ渡っていたが空気はヒンヤリとしていた。気温10℃、水温は8℃。陸上班は笑顔で我々を見送る。

まずは水面付近に横たわる木の幹に魚の仕掛けを括

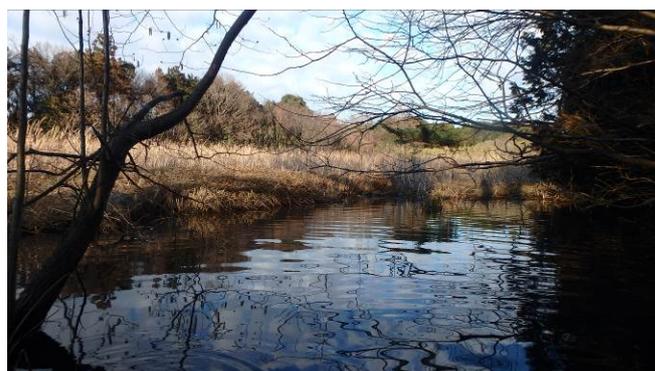


図7 池の水面部と陸上部(ガマ原)



図8 ヘドロ化した水面部

り付ける。この仕掛けはエサをいれておき、その匂いに魚が集まり、中に入ると出られなくなる。仕掛けを設置し、池の果てまで漕ぎ出た。

池は大きく分けると水面部と抽水植物で覆われた陸地化部分の2つに分けられた(図7)。陸上部といっても水分を多く含む沼地である。水面と陸の割合は2:8くらいで、ほとんどがガマ原で覆われている。

スタート地点から見渡す池は周囲の木々が深い。その中に広大なガマ原が広がり、時々空に水鳥が舞う。周囲の木々が道路、建物などの人工物を完全に遮断しているため、時空を超えて異世界に迷い込んだような錯覚に陥る。Kも舟を漕ぎながら空を仰いでいる。水位は思ったよりもなく、非常に浅い。せいぜいひざ上くらいだ。舟も浅い水位で座礁したので、舟を降り、水底へ足をつっこむ。ところが、片足を入れた途端に、足は突然泥の底に消え、胴長の腰付近までずぼった。思ったよりも沼は深い。舟にっかり体制を立て直し、表面積をできるだけ大きくして、船体に捕まり、水面を蹴り、泥を掻き分けるようにして進む。なんとか陸地部までたどり着き、そこを足掛かりに広大なガマ原に上陸を果たした。

5. ガマ原を掻き分け沼地に行く(図2の地点2~4)

私が先に上陸を果たしたので、Kの上陸を手助けした。手を差し出し、思いっきり引っ張り上げる光景は某栄養ドリンクのCMでよく見るシーンとよく似ている。冬のガマ原は枯れ果てていて一面ガマ原でどこからどこへ向かって歩けばよいか迷いそうだが、まずは枯草の枯れた箇所を掻き分けて池の中を北進する(ダンジョン図内の2~3)。冬だからこそスカスカになった草の中を進めたがこれが夏ならこうはいかないだろう。



図9 協力して進む



図11 調査を終え疲れ果てた2人



図10 池の排水口

池の最北部に到着すると、黒くヘドロ化した水面が姿を現した(図8)。水面に足をおそろおそろ突っ込むとドンドン引きまされるので、途中で足を引き戻した。霞ヶ浦の水の滞留時間ですら230日以上はあることを考えると、水の流れが極端に乏しいこの池の滞留時間は1年以上あるだろう。そのため、腐った木々は水底に堆積を繰り返し、ヘドロ化したものと思われる。

サデ網とタモ網を入れて生物を探してみたが、特に見つけれなかった。

その後、ボートを泊めておいた場所まで戻り、東を目指した(図2の地点5)。東側に行く際この先がどのくらい足場が悪いのか未知数だったので、ボートを1艇2人で引っ張ってもっていくことになった。

ボートを持ってきたのは正解で、途中、ガマ原の中でも極端に足場が悪いところがあり、そこは舟に上半身を預け、膝立ちのような体制でできるかぎり表面積を大きくして、ずぼらないようにして進んだ。ところどころで、どちらが足を沼地にとられながらも助け合いながら進んだ。掻き分けて進むと、時々遠くのほうで、水鳥が数羽バサバサと飛び立つ。カモ類が越冬にきているようだ。ここならば水鳥も安心して羽を休められる。西日が差す、西の空を振り返ると、大学で一番高い講義棟が遠くに見える。

6. 沼地を越えて(図2の地点4~6)

2人はさらにガマ原を掻き分けて進んだ。途中何度も足を取られながらも、ひたすら進んだ。ようやく南側の水面のあるところまで到達した(図9)。木陰になっ

ている水面にはとほころとほころ氷も張っている。当然ながら水温も低い。午後を過ぎて少し寒くなってきた。日没が近づいていると感じ、再びボートに乗り込み、進んだ(図2の地点4~6)。先回りした陸上班が我々の到着を待っていてくれた。さらに西に進むと池の西端(図2の地点6)がみえた。ここは少し池の水に流れがあるようで水面も開けている。池の端には排水口が設置されており(図10)、池は暗渠をとおり、道路を横断し、花室川に放流されている。このエリアでもサデ網とタモ網を入れてみたがまったく何も捕れなかった。

7. 謎めいた池を巡って

一旦陸上を通り、スタート地点へ戻り、仕掛けともう1艇のボートを回収。仕掛けの中には何も入っていなかった。今回は時期が悪かったのか、それとも本当に魚はいないのか。謎が残った。一方で水鳥が多く棲んでいるということはどこかに水生生物の姿もあるはずである。時期を変えてもう一度確かめてみたい。

今回採集は不漁に終わったが、謎めいた池を巡るという燃える冒険心は何にも換えがたい。今回は池の北東部を全く踏み入ることができなかったが、地形図をみると、結構大きな水面があるようである。次回の課題として冬の大潜入を終えた(図11)。

【筆者について】

坂本 貴啓(さかもと たかあき)

1987年福岡県生まれ。北九州市で育ち、高校生になってから下校途中の遠賀川へ寄り道をするようになり、川に興味を持ち始め、川に青春を捧げる。高校時代にはYNHC(青少年博物学会)、大学時代ではJOC(Joint of College)を設立して川活動に参加する。自称『川系男子』。いつか川系男子や川ガールが流行語になることを夢みている。筑波大学大学院 システム情報工学研究科 博士後期課程 構造エネルギー工学専攻在学中。白川直樹研究室『川と人』ゼミ所属。研究テーマは『河川市民団体における活動量の定量的分析』と題し、河川市民団体の活動がどの程度河川環境改善の潜在力を持っているかについて研究中。最近のお気に入りには水辺でガサガサをすること。

水辺からのメッセージ No.69

岡村幸二 (JRRN 会員)

時を越えて糧となる： 川の機能を知り尽くした成富兵庫の“石井樋”を現代に復元



撮影：2014年12月（佐賀県・佐賀市大和町尼寺）

◆成富兵庫の治水流儀

石井樋は、佐賀城下に生活用水と農業用水を供給するため、江戸時代初めに成富兵庫茂安によりつくられました。有明海の干満差を考慮し、自然に逆らわない方法（霞堤、野越、堤防内遊水地など）を特徴としています。

石井樋の治水事業は、「洪水をして走らせず、如何にして歩かせるかにあるように思われる」（小出博著作より）と言われるように、荒籠、象の鼻、天狗の鼻、野越などで水流が制御され、“石井樋”を通ることで水量が制御されます。

■ JRRN 会員皆様からの寄稿記事を募集しています！

旅先で見かけた水辺の風景や思い、水辺再生に関わる様々な活動報告、また河川環境再生に役立つ技術等、JRRN 団体・個人会員皆様からの寄稿記事をお待ちしています。（JRRN 事務局）



写真：テムズ川（ロンドン）

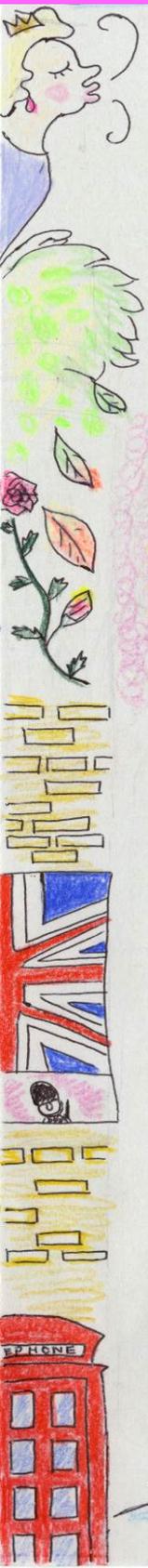


あの日のあの川 リレー日記 ～第1話～



あの日のあの川
リレーDiary

みなさんはどこの川でどんなことをした記憶がありますか？幼少期や青春時代に体験した川での記憶を日記として掘り起こして語るコーナーです。リレー形式で毎回次の人にバトンをつなぎます。



第1話主人公 川合 君穂

(筑波大学 社会・国際学群 国際総合学類4年 白川(直)研究室『川と人』ゼミ)

(■川ガール・□川系男子)

(出身地を流れる川：愛知県天白川)

「テムズ川～想像と記憶～」

いつのこと？：高校時代過ごしたイギリス生活

どこの川？：テムズ川

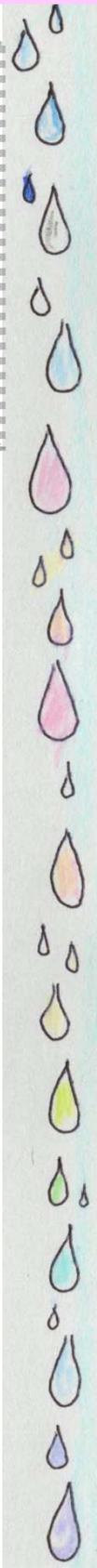
私には漠然とした「川はきれいなもの」という意識が、幼い頃からある。川はサラサラと流れ、春には薄紅色の桜を映し出す。夏には子どもたちの遊ぶ声が聞こえる場所となり、日差しを受けてキラキラと光る。青く澄んだ水は稲を育み、秋には赤トンボが飛び交って、冬には氷が薄く張る。古き良き里、稲作文化を背景に育った人間の持つイメージそのものであると思う。そんな名もなき川が私の心のふるさとを流れている。

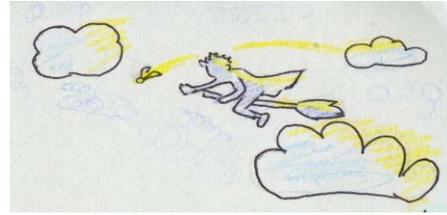
理想はあるものの、私自身はそのような川に実際触れ合った記憶は一切ない。母校である中学校の近くを流れる天白川に、小学2年生の時授業の一環として入ったことがある。生物こそたくさんいたが、血を吸うヒルもいれば草もボウボウで近寄りたくなかった。それ以降、キャンプや旅行でも川には親しんでこなかった。

ならばどこから意識が形成されたのか。それは文学と、世の中に流布している風景写真付きカレンダーたるもののおかげだ。絵本や小説などは私の「川＝綺麗」の感覚を作り出し、カレンダーの写真も「こんなにきれいなせせらぎや川が、日本・世界にはある」ということを教えてくれた。文字から汲み取った想像の川と、写真家の赴いた存在する川が私の中では混ざり合った。そして完成したのが、幼いころの（そして今でも抱き続けている）川に対するイメージ・意識である。



では、いきなりだがテムズ川といたら人はどんな川を思い浮かべるのだろうか。





ある人は、映画「ハリーポッター」シリーズに出てきたシーンを思い浮かべたりするのだろうか。シャーロックホームズが活躍した場所を流れるその川は、小説などの影響で世界からの認知は高く、イギリスを代表する川だ。世界の人に「日本の川は？」と聞かれてもテムズ川を越す認知度はないだろう。

私は高校時代を4年間イギリスで過ごした。ロンドンから2時間離れた「バース (Bath)」という街の近郊で寮生活を送った。学校はまさに自然の中で、車がないと街には出られず、牛や馬がおり、キジもウサギもいれば、羊が時々校内を横切ったりした。バースはその名の通り「お風呂」である。昔ローマ人が温泉を作った場所だ。キツネ色の石でできた街並みも魅力も、私はロンドンに負けないと思っている。周辺を流れる川はとてもきれいだ。そんなこともあってか、まだ川の知識が乏しい私は、なぜかテムズ川もこれくらい綺麗だろうと思っていたのだ。関わる英国人は皆自然が好きで、国は自然の豊かさを象徴する「妖精」の発祥地でもあるのだから。

留学して2年目ようやくその姿を拝める日がやってきた。結果、失望。

今振り返ってみれば、当時なぜそれほどまでにショックを受けたのか私には分からない。規模の大きさを除いて、東京駅近くの神田川と同じような見た目の水質だと今でこそ思う。ただ、イギリス生活において私の周りには常に自然があり、お世話になった人も自然が好きだった。そのことから田舎ののどかな流れから、急に向き合ったテムズ川はなんとも衝撃だったのである。濁った水だった。海に近いせいもあったのだろう。それに、都市なのだからといえばそれで済むだろう。現に産業革命で国土の森を失い、見渡しの良い丘が広がるイギリスは、今でも当時の煤が建物から剥がれるせいか、一日過ごしただけで鼻の穴が真っ黒になった。19世紀のロンドンでは工場や家庭から出る石炭の煙で霧が白くなく、茶色だったようである。イギリスで紳士が黒ずくめの服装をしていたのは、もしかしたらその影響があったのかもしれない。空気が汚れば、水も同様だ。もしかしたらテムズ川の川底に当時の煤が今でも沈んでいるとも考えられる。

衝撃を除いて私がテムズ川で気に入ったところは、川の兩岸のスペースがとても広く、ビックベンや、ロンドン・アイ、タワーブリッジなどまさに英国の歴史を物語る建物が見渡せることである。川岸の活用、その開けた景観を生かす、という面では見習いたいと思う。人口は日本と比べて少ないが、同じ島国でも「スペース」の美しさを表現する見せ方はやはり座布団2枚でも足りないだろう。

想像、理想と記憶。すべて人の中にあり、根を張り育ち、抽象化されていく。時にイメージは茂らせた想像の葉を、理想をいうものに美しく色づけさせる。しかし現実燃えるような紅葉を一瞬にして、カサカサと水気のない落葉へと変えさせる。

今を生きている子どもたちは川といったらどういうイメージを持っているのだろうか。

今なら想像と理想は、実際目にしなくてもネットで一瞬にして育つ前に摘み取られてしまうのではないだろうか。しかし現実を見ても私の意識に揺らぎはない。私はテムズ川をよい先生として、記憶のエッセンスを優しく注ぎながら再び理想の芽を育てている。

人間は不可能だと思えたことを実現してきた。人間は空を飛び、どんなに離れていようとも顔をみて友人と話せる環境をつくり出した。だから思うのだ。私の意識の中の川はもっと身近に存在し得るのだということ。豊かな川を人々が心の中で、そして頭の中で抱き続ける限り、この夢は終わらない。そしていつか実現するだろう。今は夢物語でもいい。

現実につみとられてしまったならば、記憶からまた育ててゆけばいい。子どもたちが理想の川を描きつづける限り、理想は消えない。

私はこれからまたたくさんの人と川に出合っていく。そして行動し続けようと思う。

心のふるさとが本当の故郷となる日を夢見て。

(次は中前千佳さんにバトンを託します)



【JRRN 会員からの提供情報】

■第 19 回荒川流域再生シンポジウム「自然溯上のアユを復元するための連携について語ろう」(3/14 開催)

NPO 法人荒川流域ネットワークでは、今年も第 19 回荒川流域再生シンポジウムを開催します。テーマは「自然溯上のアユを復元するための連携について語ろう」です。6 年間のアユの標識放流調査と流域一斉水質調査の結果、現在進められている入間川での溯上環境改善事業を報告するとともに、荒川流域でのアユの自然溯上復元への取組みと関係する団体の相互連携について語り合いたいと思っています。

- ◆日時： 2015 年 3 月 14 日 (土) 12 : 30 開場/13 : 00 開会/16 : 30 終了
- ◆場所： 国立女性教育会館 (東武東上線嵐山駅徒歩 10 分)
- ◆詳細は以下参照

<http://jp.a-rr.net/jp/news/member/1932.html>



【JRRN 会員からの提供情報】

■土研新技術セミナー～戦略的な河川環境管理に向けて～(2/20 開催)

独立行政法人土木研究所より、2月20日(金)に東京で開催されるセミナー「戦略的な河川環境管理に向けて」のご案内を頂きました。



- ◆詳細は以下参照

<http://jp.a-rr.net/jp/news/member/1939.html>

【JRRN 会員からの提供情報】

■「ミツカン水の文化センター主催【水の文化フォーラム 2014】講演録」公開案内

ミツカン水の文化センターが 2014 年 11 月に開催したミツカン水の文化フォーラム 2014「水都ルネッサンス『これからの水都像とコミュニティデザイン』を考える」の実施報告が公開されました。

建築史家の陣内秀信さん、コミュニティデザイナーの山崎亮さん、地域政策研究者の中庭光彦さんによる「水都」再生に向けた方策やヒントがご覧いただけます。

- ◆詳細は以下参照

<http://jp.a-rr.net/jp/news/member/1936.html>

【海外からの提供情報】

■「ECRR (欧州河川再生センター) の最新ニュースレター」ご紹介

ECRR (ヨーロッパ河川再生センター) の最新ニュースレター (2014 年 12 月号) として、2014 年 10 月にオーストリア・ウィーンで開催された「欧州河川再生会議(ERRC2014)」総括特別号が ECRR 事務局より届きました。(言語: 英語)

本ニュースレターの序文では、JRRN が属する ARRN (アジア河川・流域再生ネットワーク) との今後の交流促進に向けた覚書締結の話題も紹介されています。



- ECRR NEWSLETTER 特別号 (英語版 PDF 7.5MB) ダウンロードはこちらから
<http://jp.a-rr.net/jp/news/member/1918.html>

また、ERRC2014 の全講演資料と映像は以下よりご覧頂けます。

- 「欧州河川再生会議(ERRC2014)」の関連資料一式 (英語版) はこちらから
<http://www.ecrr.org/NewsEvents/ERRC2014/tabid/3704/Default.aspx>
- 「JRRN 欧州河川再生会議 2014 参加報告」(日本語版) はこちらから
<http://jp.a-rr.net/jp/activity/publication/96>

(国内の河川・流域再生に関する主なイベント)

- 特別企画展 魚道展 ～川をつなぐ魚のみち～
○日時：2015年1月27日(火)～3月1日(日)
○主催：相模川ふれあい科学館 アクアリウムさがみはら
○場所：相模川ふれあい科学館(神奈川県相模原市)
<http://jp.a-rr.net/jp/news/member/1929.html>
- 豊田市矢作川研究所シンポジウム 矢作川の水を考
える ー良い水のものさしとは?ー
○日時：2015年2月14日(土) 13:00～16:45
○主催：豊田市
○場所：JA あいち豊田ふれあいホール(愛知県豊田市)
<http://jp.a-rr.net/jp/news/event/2077.html>
- 芥川倶楽部設立10周年記念シンポジウム もっと身
近な川づくり
○日時：2015年2月14日(土) 14:00-16:50
○主催：芥川・ひとと魚にやさしい川づくりネットワーク
○場所：総合センター14階C1401(大阪府高槻市)
<http://jp.a-rr.net/jp/news/event/2081.html>

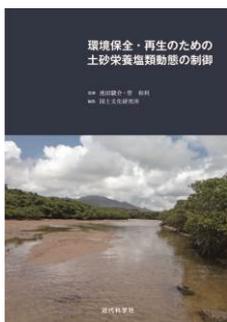
- 土研セミナー～戦略的な河川環境管理に向けて～
○日時：2015年2月20日(金) 13:30～17:00
○主催：独立行政法人 土木研究所
○場所：砂防会館3階会議室(東京都千代田区)
<http://jp.a-rr.net/jp/news/event/2090.html>
- 平成26年度「RACフォーラム」ー水防災・安全管
理についての全国フォーラム
○日時：2015年2月28日(土)～3月1日(日)
○主催：NPO法人川に学ぶ体験活動協議会
○場所：国立オリンピック記念青少年総合センター
(東京都渋谷区)
<http://jp.a-rr.net/jp/news/event/2079.html>
- 第19回荒川流域再生シンポジウム「自然溯上のアユ
を復元するための連携について語ろう」
○日時：2015年3月14日(土) 13:00-16:30
○主催：NPO法人荒川流域ネットワーク
○場所：国立女性教育会館(埼玉県比企郡嵐山町)
<http://jp.a-rr.net/jp/news/member/1932.html>

(海外の河川・流域再生に関する主なイベント)

- 2015.3.6-8(ダッカ/バングラ) 5th Int. Conf. on Water and Flood Management
- 2015.4.12-17(Daegu/韓国) 7th World Water Forum
- 2015.6.15-19(Provence/フランス) River Restoration; Geomorphic and Ecological Tools
- 2015.6.28-7.3(ハーグ/オランダ) 36th IAHR World Congress
- 2015.6.30-7.2(Wageningen/オランダ) Int. Conf. on River and Stream Restoration
- 2015.8.2-7(シンガポール) 7th APHW Conference
- 2015.9.21-23(ブリスベン/オーストラリア) 18th international Riversymposium
- 2016.2.8-12(メルボルン/オーストラリア) 11th Int. Symposium on Ecohydraulics
- 2016.7.27-29(リエージュ/ベルギー) 4th IAHR Europe Congress
- 2016.8.28-31(コロンボ/スリランカ) 20th Cong. of IAHR Asia Pacific Division
- 2016.9.19-22(Stuttgart/ドイツ) 13th Int. Sympto. on River Sedimentation

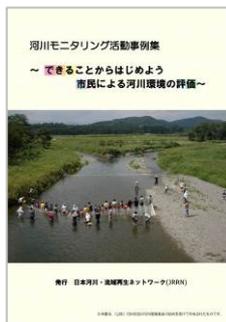
書籍等の紹介 Publications

- 環境保全・再生のための土砂栄養塩類動態の制御
(2014.10 発刊)
- ・監修：池田駿介・菅 和利
- ・編集：国土文化研究所
- ・出版社：株式会社近代科学社
- ・価格：4,000円+税
- ・出版年月：2014年10月



JRRN 事務局を共同運営する(株)建設技術研究所国土文化研究所より2014年10月に発刊されました。本書は、陸・川・海における水・土砂栄養塩類の移動・制御、およびそれらが生物・生態系に及ぼす影響を野外や実験室において行った研究の成果など、自然環境再生に向けた新たな視座が紹介されています。

- 河川モニタリング活動事例集～できることからはじめよう 市民による河川環境の評価～(2014.3 発刊)
- ・執筆協力：河川再生に携わる市民団体や行政機関
- ・発行：日本河川・流域再生ネットワーク(JRRN)
- ・出版年月：2014年3月



市民が主体的に取り組む河川環境のモニタリング活動の実態を調べ、各地のモニタリング活動事例や市民による河川モニタリング活動の更なる活性化に向けたヒントを紹介しています。

※本冊子の入手方法

JRRN 事務局までご連絡ください。送料のみご負担頂いた上で、無料で提供致します。(JRRN 会員限定)
info@a-rr.net / 電話：03-6228-3862

■ JRRN の登録資格 (団体・個人)

JRRN への登録は、団体・個人を問わず無料です。
市民団体、行政機関、民間企業、研究者、個人等、所属団体や機関を問わず、河川再生に携わる皆様のご参加を歓迎いたします。

■ 会員の特典

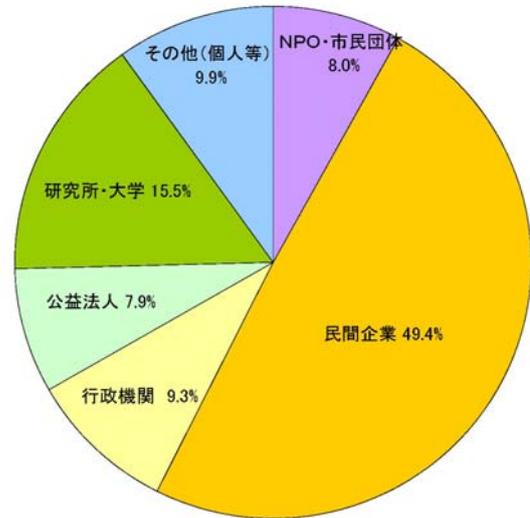
会員登録をされた方々へ、様々な「会員の特典」をご用意しています。

- (1) 国内外の河川再生に関するニュースを集約した「JRRN ニュースメール」が週 1 回メール配信されます。
- (2) 国内外のセミナー、ワークショップ等の開催情報が入手できます。また JRRN 主催行事に優先的に参加することが出来ます。
- (3) 必要に応じた国内外の河川再生事例等の情報収集の支援を受けられます。
- (4) JRRN を通じて、河川再生に関する技術情報やイベント開催案内等を国内外に発信できます。
- (5) 韓国、中国をはじめとする、ARRN 加盟国内の河川再生関連ネットワークと人的交流の橋渡しの支援を受けられます。

■ 会員登録方法

詳細はホームページをご覧ください。

<http://www.a-rr.net/jp/member/registration.html>



2015年1月31日時点の個人会員構成
(個人会員数：681名、団体会員数：54団体)

JRRN 会員特典一覧表(団体会員・個人会員)

提供サービス	JRRN 個人会員	JRRN 団体会員	非会員 (一般)
1 ホームページへのアクセス及び記事へのコメント入力 ※1	◎	◎	◎
2 ホームページ「イベント情報」欄でのイベント掲載 ※2	◎	◎	◎
3 ニュースメール(週1回)の配信 ※3	◎	◎	×
4 Newsletter(毎月)及び年次報告書(年1回)等の発刊案内メールの配信 ※3	◎	◎	×
5 JRRN/ARRN主催行事の優先案内・優先参加 ※4	◎	◎	×
6 国内外の河川再生関連情報・技術収集や専門家・組織紹介の支援 ※5	◎	◎	×
7 ホームページ「会員からのお知らせ」内及びニュースメール「会員からのご案内」欄で団体が関わる行事・出版物・製品等の案内の掲載 ※6	△※7	◎	×
8 ホームページ「会員登録状況」「国内団体」内及び年次報告書内で団体名の掲載	×	◎	×
9 ARRN活動に関連する英語ニュース(ARRN Newsletter等)の不定期配信 ※8	×	◎	×
10 JRRN及びARRNが保有する国内外専門家・団体等との連携等の支援 ※9	×	◎	×

会員特典詳細はウェブサイト参照：<http://www.a-rr.net/jp/member/benefit.html>

【お気軽にお問い合わせください】

日本河川・流域再生ネットワーク(JRRN) 事務局



〒104-0033 東京都中央区新川1丁目17番24号 新川中央ビル7階

公益財団法人リバーフロント研究所 内

Tel: 03-6228-3862 Fax: 03-3523-0640 E-mail: info@a-rr.net

URL: <http://www.a-rr.net/jp/> Facebook: <https://www.facebook.com/JapanRRN>

JRRN 事務局は、「アジアにおける河川再生のためのネットワーク構築と活用に関する研究」の一環として、公益財団法人リバーフロント研究所と株式会社建設技術研究所国土文化研究所が公益を目的に運営を担っています。

